

【特集】青空が広々と映える熊川宿の街なみ

今回は、福井県三方上中郡若狭町の熊川宿の訪問記です。今も昔ながらの情緒を残す宿場町、熊川宿の街なみは、落ち着いた時間を旅人に与え続けており、1996年に（10.8ヘクタールが）重要伝統的建造物群保存地区に指定されました。又の名を鯖街道とも言われ、往時の賑わいがしのべられます。

■鯖街道の歴史

古代、若狭は朝廷に食料を献上する御食国（みけつくに）のひとつでした。日本海で獲れた魚や貝が遠路はるばる京都へ運ばれ、「京は遠ても十八里」と言われるようになり、特に18世紀後半からはたくさんの鯖が若狭の海で陸揚げされ、「鯖街道」と称されるようになったのです。与謝蕪村も鯖を背負い都に入る若狭の人々が目に止まったのか「夏山や 通ひなれたる 若狭人」と詠んでいます。

■熊川宿の誕生

秀吉に重用され若狭の領主となった浅野長政は、天正17年（1589）に熊川が交通と軍事において重要な場所であることから、諸役免除して宿場町としました。以来40戸ほどの寒村が200戸を超えるような町とまりました。（熊川宿パンフより）

■町並みの特徴

平入建物（棟を街道に対して並行させた建物のことで、街道側では軒が真っすぐに見える。）と妻入建物（棟を街道に対して直角に置く建物のことで、街道側では、屋根の三角部分が見える。）が混在しながらも、連続性を持った町並みを形成しているのが特徴です。

また、熊川宿の歴史的景観に欠かせないのが、豊富で流れの速い水路である“前川”です。この清水は“平成の名水百選”に選定されました。

歴史的な町並みには珍しく、道路幅員が広いことも特徴です。道路が広いことで、ゆったりと町歩きを楽しむことができますし、電線が地中化されているので、空が余計に広く感じ、解放感があります。

■町を歩いてみて

全長約2キロの町並みは、時間が止まったかのような、ゆったりとした時間を演出してくれます。そして、前川のせせらぎが、私たちの心を癒してくれます。住民の方々は、親しげに挨拶をしてくれ、こちらも、自然と挨拶が口から出るような、安心感のある町です。おすすめは、“語り部”さんに道案内をしていただくことです。熊川宿の町がより身近に感じられ、より楽しい旅を満喫することができますよ！

大阪からでも、2時間程度で行くことができます。ぜひ、歴史的な町並みを体験してみてください！



✂ [エッセイをお寄せください。] ✂

皆さんが日本の電柱・電線社会の現状について感じられていることをエッセイとして綴り、お送りください。

本会報の【随想】欄に掲載させていただきます。

1000～1500文字、簡単な自己紹介（お仕事、住所等）とポートレート（顔写真）を添えて下さい。送付先はE-Mail: info@NPONPC.org です。投稿をお待ちしています。

NPO法人電線のない街づくり支援ネットワーク事務局 井上、志熊、根井、森山

「私達」が住む日本の空を、「私達」が美しい空へ変えましょう！

美空～MISORA～

第35号

発行日:2011年6月28日(火)

発行者:NPO法人電線のない街づくり支援ネットワーク

理事長 高田 昇

【お詫び】5月発行の36号は34号の誤りでした。大変申し訳ありません。以後このようなミスが起きないようにしてまいります。

【活動報告】

6月23日(木)大阪駅前第2ビル・キャンパスポート大阪で、理事会、総会、セミナーが行われました。

総会とセミナーが同時開催されたこともあり、たくさんの方が来られました。ありがとうございます。

報告1 理事会

「地中化を日本全国に広めるにどうしていくべきか」という今年度の活動テーマに対し、3つの委員会が活動計画を報告しました。今年度、NPOでは河内長野やつくば市の地中化の支援を行っていく予定です。

報告2 総会

平成22年度の事業報告、決算報告及び平成23年度の事業計画案、予算案等を審議致しました。今回新たに2名の理事が誕生いたしました！東亜工業(株)荒関勝則さん、(株)イトーヨーギョー井上良一さんです。お二人のご活躍を期待しています。

報告3 『電柱のないまちづくり』出版記念セミナー

今回、当NPOの書籍『電柱のないまちづくり』が出版1周年を迎えたことを受け、記念のセミナーを行いました。テーマは「震災と電線類の関係性」で、講師に都市防災の第一人者である関西学院大学教授室崎益輝先生をお招きして講演して頂きました。

東日本大震災では地震で大規模な停電が起き、テレビや電話そしてTwitterも使えなくなったとのことでした。そのために津波の情報が入らず、多くの方が津波の被害を受けたというお話にはとてもショックを受けました。それとともに電気の大切さ、そして信頼性が高い地中化の素晴らしさを再認識しました。しかし地中化の管が破損したとき「破損場所を見つけ、普及するのに時間がかかる」というデメリットも指摘され、地中化工法をさらに改良しなければならないということでした。

最後に室崎先生は「どちらにしろ、地中化は9割賛成！地中化は推進すべきだ。」とおっしゃられました。当NPOでも、今回のセミナーの指摘を活かし、今後の活動を進めてゆきます。詳しい内容は次回の美空で掲載いたします。



NPO法人電線のない街づくり支援ネットワーク事務局 (株)ジオリズム内 根井 井上

Mail: info@NPONPC.org、 <http://nponpc.org>

Tel: 072-653-5811 Fax: 072-653-5833

【随想】 《安全で快適な美しい商店街をめざして》（1）

今回は、当 NPO の会員の東康七さんが投稿して下さったエッセイです。

東さんは、アメリカ、ヨーロッパへのご出張経験から、中世ヨーロッパでの都市作りそして市民文化の歴史を勉強され、歴史的観点から、欧米と日本の電線類地中化の違いを考察して頂きました。

■ 電柱地中化問題に強い関心を持つまでの経緯

1980年代に流通業界に入り、チェーンシステムを学ぶため先ずアメリカへ、次いでヨーロッパへと、チェーン本部・物流センターをはじめショッピングモール、スーパー・各種専門店・飲食店等の視察研修に参加。わが国は欧米に市場開放を迫られ、続々と新しい流通業態が上陸しわが国の流通業界に革新をもたらした時代である。当時は新しい業態のコンセプトや運営ノウハウを学ぶことで精一杯であり、欧米の街並み・景観の美しさについては、あまり関心を払っていなかった。その後もヨーロッパ諸国の視察研修を続けるうちに、中世の面影を残す旧市街地がかつては城壁都市の街であったことを知り、電柱1本も見当たらない城壁都市の街並みに興味を抱き研究を始めた。わが国の街並み・景観と比較して、ヨーロッパの街並み・景観の美しさの原点は、城壁都市にあると認識をもつようになった。



■ 欧米のまちは、都心も郊外もほとんど電柱が見当たらないのは、なぜだろうか

(1) 欧米の人々は、なぜ、家の「内」も「外」も同様に景観を大切にするのか

欧米の街はなぜ環境と調和がとれて美しいのか、なぜ人々は家の外の景観を大切にするのか?その背景について“歴史、文化や風土の違いにあり”との短絡的な説に飽き足らず思い悩んでいた頃に、故芦原義信東大教授の名著『街並みの美学・同続』に出会い、まさに目からウロコが落ちる思いであった。その著書などから学んだ要点を整理すると以下の通りである。

□ “地続きの大陸にあるヨーロッパの諸都市は、北方や東方あるいは南方からの異民族・異教徒の侵入と皆殺しに備えて、堅固な「城壁都市」を築き、領主・領民・農民・家畜も立てこもり戦った。城壁から内部（中心部）に向かって連続して石造りの建造物が築かれ、中心部には必ず広場（王宮・教会・等）があり、人々の交流、憩いの場となっている。このように城壁の内部はまるで一軒の大きな家の空間=街にひとしい。自分たちの家も城壁の内側の街の空間も等しく自分たちの空間である。ここに靴を履いたまま屋外も内部も歩く生活習慣が生まれた。

当 NPO ではメールマガジンも配信しており、電線地中化に関するコラム・情報を月2回お楽しみいただけます！ぜひこちらにもご登録ください！
→ <http://www.mag2.com/m/0000266000.html>

また、家の内部と同様に調和のとれた外部の景観・街並みを大切にする意識が培われ、公共を優先する西欧的都市計画の原点となった。一方、わが国土は大陸から遊離し、周囲を海洋（=城壁の役目）で囲まれた島国で異民族の侵入から守られ（例外は元寇）、「城壁都市」を築かなかった世界で唯一の民族である。

城下町はあっても城に囲まれた街ではなかった。城を築いても城主のみ城の中に住み、武士や農民は城の外に住む。戦いに敗れても城主の切腹で終わり、農民・農地は安堵された。

そして、伝統的にわが国の木造家屋は、なんの疑いもなく靴を脱ぎ捨て「内」に入り、清潔な畳・明るい障子・床の間で家族中心にくつろぐ。一旦「外」に出るときは靴を履く。内部と外部が区別され、建物の外部には無関心で都市空間の充実という考え方は希薄であった。お江戸日本橋の上を首都高速道路が渡る、家屋のベランダで洗濯物や布団を平気で干す、街には雑多な屋外広告や電線の垂れ下がりに日本人は無頓着である。西欧では見られない都市景観であり生活習慣である。

われわれ日本人は、ついに内外空間領域の同一視が出来ないまま、都市景観として極めて貧弱な街並みを作ってきた。今後、よりよい街並みを構成するためには、空間領域に関する意識革命がまさに必要である。



東 孝七

「ヨーロッパと日本ではなぜこんなにも地中化普及率がちがうのか」を歴史的観点から解説して頂き、とても勉強になりました。次回も引き続き東さんのエッセイを掲載いたします。

プロフィール

- 出筆者 東 康七（あずまこういち）・現住所：東京都小金井市
- ・北九州市小倉区出身、1955年都銀（現三井住友銀行）就職、流通業界をえて独立、Azexマーケティング研究所代表 経営コンサルタント（中小企業診断士）
- ・（社）中小企業診断協会東京支部三多摩支会理事、東京都中小企業振興公社登録専門家、一般社団法人経営支援多摩代表理事、NPO法人シニアSOHO小金井副代表理事
- ・専門分野：商店経営・商店街活性化診断支援、まちおこしアドバイザー 他

当NPOのHP(ホームページ)でも、最新情報を詳しく載せていきますので、ぜひこちらへもアクセスしてください！
<http://nponpc.org/top.aspx>

